

企画展示

# 宮川香山 図録展示

## 横浜から世界へ羽ばたいた芸術

県立図書館において以下の期間展示したものです。

展示期間:平成29年2月10日(金)~5月10日(水)

会場:県立図書館本館1階 展示コーナー

お問合せ

神奈川県立図書館 資料部情報整備課

電話:045-263-5922 FAX:045-241-0985

### 目次

#### ■ 香山が活躍した万国博覧会

- (1) 明治の工芸政策
- (2) 横浜の製陶
- (3) 日本人と万国博覧会
- (4) フィラデルフィア万国博覧会
- (5) シカゴ・コロンブス世界博覧会
- (6) 1900年パリ万国博覧会
- (7) 内国勧業博覧会

#### ■ 眞葛焼解説

- (1) 眞葛焼の概要
- (2) 特色1:高浮彫
- (3) 特色2:釉下彩
- (4) 香山窯について
- (5) 帝室技藝員
- (6) 終焉
- (7) 眞葛焼コレクション

#### ■ 年表

#### ■ 展示資料一覧

みや がわ こう ざん

# 宮川香山 図録展示

## 横浜から世界へ羽ばたいた芸術

まぐずやき

宮川香山は横浜で独創的な眞葛焼を制作した陶芸家です。2016(平成28)年5月20日は没後100年の命日でした。

香山の作品は海外にその多くが残されていましたが、熱心なコレクターの活動もあって、今ではかなりの数の作品が国内で所蔵されています。それらのコレクションによる展覧会が開かれたり、常設展示のミュージアムが造られたり、香山の作品は今なお愛されているといえます。

今回の展示では、図録を中心に香山の足跡をたどります。また香山の名を広く世界に知らしめた、万国博覧会との関わりについてもご紹介します。

みや がわ こう ざん

# 宮川香山について

明治時代の日本を代表する陶工で眞葛焼(まくずやき)の創始者です。

1842(天保13)年、京都の眞葛ヶ原に、陶工眞葛長造の4男として生まれました。

1870(明治3)年、横浜に移住し、翌年太田村不二山下(現・横浜市南区庚台)に窯を開きました。

「高浮彫(たかうきぼり)」の技法で海外でも高く評価され、1876(明治9)年以降国内外の博覧会で受賞するなどの実績を残しました。

後期には釉薬の研究に取り組み、「釉下彩(ゆうかさい)」の技法を用いた磁器作品を多く生み出しました。

1896(明治29)年、陶芸界から二人目の帝室技藝員に任命されました。

1897(明治30)年、緑綬褒章を受賞。

1916(大正5)年、本郷駒込の別邸で75歳の生涯を閉じました。墓所は横浜市西区の久保山墓地。

# 明治期の工芸(1)

## 政府の工芸政策

幕末に欧米の万国博覧会に出展した日本の工芸品や美術品は、優れた装飾性が好まれ、外貨を稼ぐ輸出品となる可能性を示しました。

明治に入っても政府は、殖産興業政策の一環として、その生産と振興に力を入れました。

工芸品の輸出は、外貨を稼ぐというだけでなく、日本の文化や技術のレベルの高さ、他の国とは異なる美術様式などを世界にアピールできました。その舞台となったのが、19世紀に欧米で盛んに開催されていた万国博覧会でした。

こうして、日本の主な産業は万国博覧会やその国内版である内国勸業博覧会への出品を奨励されました。

宮川香山(みやがわ・こうざん)の作品も、このようにして海外で耳目を集め、高い評価を受けました。

参考文献

『横浜・東京 明治の輸出陶磁器』

『明治・大正時代の日本陶磁』

# 明治期の工芸(2)

## 横浜の製陶

1859(安政6)年に横浜が開港すると、外国人居留地や日本人街が整備され、新たな経済活動の中心地として発達するなか、美術工芸品を扱う商人も次々と横浜に出店しました。

1875(明治8)年に井村彦次郎(いむら・ひこじろう)が店を構えるなど、明治時代の初めには横浜での輸出向けの陶磁器絵付け業が始まりました。

横浜の絵付け業は、小規模な工房が多く、他所の窯業地から取り寄せた素地を販売業者が陶画工に送り、絵付けをされた後、焼付業者を経た完成品として販売業者へ戻す、という業態が主でした。

その中で、宮川香山の眞葛窯は成形から絵付けまでを一貫して行うことのできる規模を持った工房でした。『横濱銅版畫』(展示ケース2)所収の「横浜緒会社緒商店之図」に描かれた「陶器製造所 眞葛香山」にその様子がうかがえます。

# 香山が活躍した万国博覧会(1)

## 日本人と万国博覧会

日本に初めて「万国博覧会」が伝わったのは、1853(嘉永6)年の、『(オランダ)別段風説書』に記述されたニューヨーク万国博覧会でした。

国際博覧会との直接的な接触は、1862(文久2)年のロンドン博覧会からで、英国の駐日公使オールコックが収集した日本の品々が出品されました。

日本が正式に参加した、1867(慶応3)年のパリ万国博覧会には幕府からの出品に加えて薩摩藩、佐賀藩が独自に参加しました。その出品物は、3者合わせて1,356箱になりました。会場内には日本風の茶店が造られ、最大の呼び物として人気を集めました。

この博覧会に将軍徳川慶喜の名代として、弟の昭武が派遣されましたが、その一行に加わっていた渋沢栄一が著書『航西日記』(『澁澤栄一滞佛日記』所収。展示ケース1)に博覧会の正確な描写を残しています。

# 香山が活躍した万国博覧会(2)

## フィラデルフィア万国博覧会

アメリカ独立100周年を記念し、独立宣言が発布された地フィラデルフィアで開催。アメリカで2回目の大規模な万国博覧会でした。1876(明治9)年、5月10日から11月10日までフィラデルフィア・フェアモント公園で開催されました。

この博覧会は、「万国の美術・工業・石油製品に関する国際博覧会を開催し、アメリカの独立百周年を祝賀する」というアメリカ連邦議会の決議により動き出しました。

宮川香山は多くの万国博覧会に出品し、様々な賞を受賞していますが、眞葛焼と宮川香山の名前は、この博覧会で初めて公式に記録されています。この博覧会で香山は、第二類装飾陶器の部門で銅牌を受賞しました。『海外博覧会本邦参同史料第1輯』(展示ケース1)の「三. 米國費府博覧會」の「第六審査及褒賞」の項目に「第二類 装飾陶器 太田 宮川香山」の記述が見えます。

# 香山が活躍した万国博覧会(3)

## シカゴ・コロンブス世界博覧会

「コロンブスのアメリカ大陸発見400年」記念として、1893(明治26)年5月1日から10月30日まで開催されました。

この博覧会では、日本の美術界にとって大きな変化がありました。

これまでの博覧会で「工芸品」として扱われ、美術館での陳列が認められなかった日本作品を、陶磁器、蒔絵などの美術工芸品は「美術品」である、と日本側が強く説明し、美術館に陳列させることに成功しました。

この頃、高浮彫(たかうきぼり)の陶器から釉下彩(ゆうかさい)の磁器へと、制作の転換を果たしていた宮川香山は、「黄釉銹絵梅樹文大瓶(おうゆうさびえばいじゅもんたいへい)」他を出品して、金牌を受賞しました。

現在、「黄釉銹絵梅樹文大瓶」は東京国立博物館が所蔵し、重要文化財となっています。

# 香山が活躍した万国博覧会(4)

## 1900年パリ万国博覧会

1900(明治33)年4月15日から11月12日まで開催されたパリ万国博覧会は、19世紀最後の年の開催に相応しく、この世紀の近代科学の進歩と工業化の成果を誇示したものになりました。

この博覧会では、日本の古美術品展示が本格的に行われ、皇室、全国の社寺などから駆り出された展示品を陳列するために「日本館」が建てられました。

この展示にあわせて日本美術の変遷を解説すべく編纂、刊行されたのが『Histoire de l' Art du Japan』で、翌年日本語訳『稿本日本帝國美術略史』(展示ケース1)が刊行されました。

日本政府の博覧会事務局は、帝室技藝員を中心とする23名の美術家に対して出品を命じ、宮川香山も宮内省御用の飾壺一対をはじめとする作品群を出品し、大賞を受賞しました。

# 香山が活躍した万国博覧会(5)

## 内国勸業博覧会

内国勸業博覧会は、1877(明治10)年から1903(明治36)年にかけて、5回開催され、すべての回に明治天皇が行幸されるなど、国内産業の奨励を象徴する催しでした。

いずれの博覧会にも工業製品他、多くの出品物が全国から集められましたが、美術分野の出品も他の出品物に劣らない注目を集めました。当時の美術工芸品は、欧米のジャポニズム(日本趣味)の流行を受けて、有力な輸出品目とみなされていたからです。

ここでも宮川香山は際立った活躍で、第1回には龍紋賞牌を受賞、第2回に出品した「水鉢(褐釉蟹貼付台付鉢)(かつゆうかにはりつきだいつきばち)」は、有功賞牌一等を受賞しました。第5回には出品のほかに審査官を務めています。「水鉢(褐釉蟹貼付台付鉢)」は、現在東京国立博物館に所蔵され、重要文化財に指定されています。